

選考総評

審査委員長 小原 光一

財団法人音楽鑑賞教育振興会は、全ての音楽活動の基礎としての「聴く力」の充実に直接大きなかわりをもつ音楽鑑賞の活動が、学校に於いてより一層盛んになることを願って、児童・生徒の皆さん並びに教員の方々から音楽の鑑賞に関する作文、論文を募り、少しでもそのことに役に立てればという考えの下に、この事業を続けてきております。

今回の応募数は前回を下回っておりますが、内容的には前回に比べると総体的にみて充実度が高まっているように感じて嬉しく思っております。応募状況や入選作品の数などにつきまして は別表に示していますので、ご覧ください。

のあり方——諸外国の音楽との比較から」でありました。

双方ともに、学校におけるこれからの音楽教育にとって大きな意味をもつ研究ではありますが、前者はこれまでに既に立派な研究が進められてきており、当財団で助成が必要であろうと認めるレベルを超えているということ、後者は研究計画の実践に向けての手順等の面で、もう若干の準備期間を置いて計画を練り深める必要があるのではないかとということから、今回は「入選なし」という結果になりました。なお、細部にわたりましたは、この後に続く各部門代表の選評にお目通しをいただきたいと思っております。

今後とも音楽科教育における鑑賞の指導の充実、発展に役立つような作文、論文を多数いただくことにより、少しでも音楽鑑賞教育の振興に寄与してまいります。

1. 応募状況

	第42回(今年度)		
	応募総数	送付数	応募校数
作文・小学生の部	1,533	195	29
作文・中学生の部	3,315	177	34
作文・高校生の部	483	45	11
計	5,331	417	74
研究助成の部	2	2	—

応募総数: 校内応募数および個人応募の合計
送付数: 学校内選考後、財団に送付された数
応募校数: 個人応募以外の参加学校数

2. 入選数

	最優秀賞	優秀賞	佳作	努力賞	入選計	学校賞	バイオリン賞	計	副賞贈呈数
作文・小学生の部	1	2	5	7	15	1	7	5	
作文・中学生の部	1	2	6	3	12	3	9	7	
作文・高校生の部	1	2	3	2	8	1	5	2	
計	3	6	14	12	35	5	21	14	
研究助成の部	入選該当なし					0	—	—	—

文部科学大臣奨励賞: 作文の部最優秀賞を、文部科学大臣奨励賞に推薦します。
学校賞について: 学校賞は、在校児童・生徒数に対する校内応募総数(応募率)の最も高い学校に賞状を贈呈。
バイオリン賞について: バイオリン賞は、学校応募による入選者が籍校に、協賛のバイオリン株式会社から賞状および副賞を贈呈。同一校から複数入選の場合、上位入賞者がバイオリン賞対象。ただし、昨年度副賞贈呈校は、本年度は副賞贈呈対象外。

3. 副賞

作文の部入選	個人賞副賞	バイオリン賞副賞
最優秀賞	AV機器 ヘッドホンなど	50V型プラズマ電子情報ボード等
優秀賞		CDプレーヤー、アンプ、スピーカー
佳作		BDプレーヤー
努力賞		BDプレーヤー

*本年度「研究助成の部」の入選はありません。

今年の〈作文の部〉の作品には、

小中高等学校とも音楽そのものとしっかり向き合っており、それぞれの分に応じて受け止めたその思いが、自分なりの言葉で書き表わされているものが、とても多くあって素晴らしいことでした。それぞれの作品の中に自ずと引き込まれていく読み応えと楽しさを感じました。また、何度か繰り返し聴く中に、今までは異なる楽しみを見付けた味わったりできることを体験し、聴いた音楽を基に自分の考え方が関連する他の事柄へもどんどんと広がっていき、それを次々に追いかけていくことの楽しさが書き表わされているものも多く、これもまた素晴らしいことだと思えました。

例年どおり、各校種の作品ともそれぞれの年齢にふさわしい文章表現で書き上げられているのを楽しく読みましたが、今年には特に〈中学校の部〉にしっかりとした作文が多かったのが印象に残っています。

象に残っています。

総じて、授業で聴いて得た感動などを、感じたまま素直に表わしてみているという財団の願いに叶った作品が多かったことを喜んでおります。

その一方で少々残念だったのは、応募総数の減少よりも、応募校数の減少幅の方が大きかったということです。少しでも多くの学校から、指導の実績としての作文を送っていただけるのを期待して待ちたいと思います。

〈研究助成の部〉には次の二点の応募がありました。一つは大阪府の「パフォーミングミュージック研究会(代表田中勤子氏)」による「鑑賞と表現を一体化した『パフォーミングミュージックの実践研究——音楽科を通じた『生きる力』の育成に向けて』、もう一つは「東京都江戸川区立葛西小学校」の長谷川真澄教諭による「日本の音楽に対する感性を育てる小学校鑑賞指導

選評●小学生の部

川池 聰

今年の小学校の部のテーマは「聴いて見つけた音楽の楽しみ」というものでした。大切なことは、作文に書かれていることがら、学校の音楽の授業で体験した音楽が中心になっていることです。今年度の作文は、ほとんどがこのテーマに沿ったものでした。

審査をするときに、まず考えるのは、「素直に自分の思いが書けているか」ということです。先生からいわれた言葉や友だちが言っている言葉を書くのではなく、曲を聴いて自分が感じたことを、自分の言葉で素直に書いていくことが大切です。

次に大切なことは、「なぜそのように思ったのか」という理由がいていねいに書かれていることです。音楽を聴いて楽しいと思ったら、その楽しさは、「なぜなのか」「どうしてなのか」と自ら

分て深く考えて文章にすることです。

また、自分の思いや考えたことが、文章としてしっかりとまとまっていること、そして、相手によくわかるような文章全体の構成を工夫することが大切です。

作品の選考には影響はしませんが、上位に入賞した作文は、文字がとてもきれいに書かれていました。次に応募する時には、ていねいな文字で文章を書くようにすると、さらに内容も充実することになると思われます。

選評●中学生の部

池田 温

審査にあたっては、テーマ「聴いてみつけた音楽の楽しみ」について、音楽を聴く楽しみや喜び、感動などが、鑑賞教室なども含めた学校での授業において得たものに視点をしばって行ないました。

テーマを自ら定め、自分の思いを自らの言葉で生き生きと高校生らしく文章表現し、読む者をひきつける内容でした。

今年度の内容傾向は、まず「鑑賞の活動内容であること」が一層定着してきたことにより、楽曲名を明示し、自分の思いを音楽的な根拠と関連させて述べている作文が増えてきた点があります。

また、テーマの設定も高校生らしく、自分の思いをいかに端的に伝えられるかという考えから工夫されている点もありません。このようなテーマの工夫は、読み手に対して、内容への洞察を促し、ひきつける要因になりました。

次年度の提言として申し上げたいことは、まず、一層多くの学校から応募があることを望んでいることではありません。どうぞ、日頃の鑑賞活動の成果をお寄せください。そして、音楽の諸要素を窓としてさまざまな発見が鑑賞活動の中で起こり、作文として結実する

最優秀賞に選ばれた渡邊侑子さんの

「私が出会った『荒城の月』」は、音楽の授業で聴いた『荒城の月』をきっかけに、その歌詞の意味を考えながら月を眺めるようになり、さらに機会を得てアメリカの大自然の中で月を眺めていると、「人間は儂い存在だが、それ故に美しいのだ」と作詞者、作曲者が表現しようとしているように強く感じていくというもので、この歌の神髄を感じ取っていかうとする様子を、論点を絞って見事に綴っているところが高く評価されました。

優秀賞の磯野はなさんの「音楽から広がる私の世界」は、授業での学習が音楽を自ら楽しむように発展していく様子が、素直な文章で綴られているところが評価されました。もうひとりの優秀賞、松田裕加里さんの「自分を発見する鏡」は、鑑賞から得られる感覚には、聴き手の人生経験とそこから培われる性格そのものが表われてくることに気づき、だから心を開いて音

ことを願っております。

選評●研究助成の部

山本 文茂

「豊かな感性の育成を目指す音楽鑑賞教育の研究」をテーマとし、音楽鑑賞教育にかかわる音楽科の実践研究計画であること、ICT機器については、使用の必要性があり、音楽科教育の充実に役立つことを審査基準としました。

応募作品は、大阪府の「パフォーミングミュージック研究会」による「鑑賞と表現を一体化した「パフォーマンスミュージック」の実践研究——音楽科を通じた「生きる力」の育成に向けて」(作品A)、および、長谷川真澄先生(東京都江戸川区立葛西小学校)による「日本の音楽に対する感性を育てる小学校鑑賞指導のあり方——諸外国の音楽との比較から」(作品B)の二

選評●高校生の部

神原 陸男

楽に身をまかせて聴けば自分が見えてくるという、音楽の本質を感じ取ろうとしているところが評価されました。その他、佳作、努力賞に選ばれた作文も、それぞれ授業を通して得た音楽のよるこびを綴られ力作であったことは、うれしいことでした。

今年の選考基準は、基本的には「学校における授業の一環であること」「鑑賞の活動内容であること」であり、具体的には、授業における鑑賞体験から得られた自らの感じ方・想いを、全体テーマである「聴いてみつけた音楽の楽しみ」に基づき、いかに素直に、生き生きと表現しているか、でありました。この度の最優秀賞・優秀賞・佳作等の受賞作文は、いずれも授業における鑑賞の感動体験を基に、

作品でした。

作品Aは、研究内容はすでにハイレベルに達していますが、目的の考察・計画が不十分であること、研究の方向が「アントレプレナー研究」に傾斜し過ぎているなどが指摘され、作品Bは、今日的な教育課題をよくとらえているが、教材選択範囲の限定、内外の音楽の比較における観点・方法の特定、具体的な研究手順の実現可能性、文章表現の未熟さなど、全体としての準備不足が指摘されました。

以上を総合的に判断した結果、本年度は「助成対象となる該当作品なし」という厳しい結論に達しました。A、B両作品を含めて、多くの皆様が「研究助成部門」へのチャレンジを今からご準備下さることを祈念しています。

選考委員

〈選考委員長〉

小原光一

勸音楽鑑賞教育振興会常務理事

〈選考委員〉

小原光一

選考委員長／勸音楽鑑賞教育振興会常務理事

島宮道男

秀明大学教育研究所／全国高等学校長協会前会長

寺崎千秋

勸教育調査研究所／全国連合小学校長会前会長

山浦勝雄

東京都進達学園三鷹市立第一中学校長／全日本中学校長会会計部長

吉田時雄

元聖徳大学講師／元勸音楽鑑賞教育振興会研究主管

渡邊孝一

音楽評論家／勸音楽鑑賞教育振興会理事

審査委員

◆研究助成の部

山本文茂 ◎

全日本音楽教育研究会大学部会長／東京藝術大学名誉教授／勸音楽鑑賞教育振興会理事

◆小学生的の部

池田 温 ◎

武蔵野音楽大学教授／勸音楽鑑賞教育

◆中学生の部

池田 温 ◎

武蔵野音楽大学教授／勸音楽鑑賞教育

金本正武

千葉大学教授／勸音楽鑑賞教育振興会評議員

丸山忠璋

全日本音楽教育研究会常任理事／武蔵野音楽大学教授

◆作文の部

川池 聡 ◎

勸音楽鑑賞教育振興会理事・開発事業主管

大川 彰

全日本音楽教育研究会常任理事・小学校部会事務局長／東京都豊島区立栗鴨小学校主幹教諭

太田眞也

全日本音楽教育研究会常任理事／東京都小学校音楽教育研究会会長／東京大田区立馬込第二小学校校長

嶋 英治

全日本音楽教育研究会小学校部会長／東京都練馬区立光が丘第六小学校長

高須 一

玉川大学芸術学部准教授／前文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官／前国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官

振興会理事

大熊信彦

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官／国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官

調査官

風見 章

全日本音楽教育研究会常任理事・中学校部会事務局長／東京都杉並区立杉森中学校校長

〈各校生の部〉

神原陸男 ◎

洗足学園短期大学幼児教育保育科学科長・教授／勸音楽鑑賞教育振興会評議員

加藤徹也

文部科学省初等中等教育局教科書調査官

山下 哲

全日本音楽教育研究会高等学校部会長／東京都高等学校音楽教育研究会会長／東京都立浅草高等学校長

振興会理事

大熊信彦

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官／国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官

調査官

風見 章

全日本音楽教育研究会常任理事・中学校部会事務局長／東京都杉並区立杉森中学校校長

〈各校生の部〉

神原陸男 ◎

洗足学園短期大学幼児教育保育科学科長・教授／勸音楽鑑賞教育振興会評議員

加藤徹也

文部科学省初等中等教育局教科書調査官

山下 哲

全日本音楽教育研究会高等学校部会長／東京都高等学校音楽教育研究会会長／東京都立浅草高等学校長

〈後援〉

文部科学省

全国都道府県教育長協議会

全日本音楽教育研究会

全国連合小学校長会

全日本中学校長会

全国高等学校長協会

財団法人日本私学教育研究所

〈審査顧問〉

福井直敬

全日本音楽教育研究会会長／武蔵野音楽大学学長／勸音楽鑑賞教育振興会常務理事

〈各部門チーフ〉

◎を先頭に五十音順敬称略 所属・職名は平成21年10月審査委嘱時点

第42回(平成21年度)入選者一覧

研究助成の部

入選該当なし

作文の部

〔個人賞〕

◇**文部科学大臣奨励賞**◇**最優秀賞**

◇小学生の部
大西いずみ

(兵庫県 学校法人甲南学園 甲南小学校六年)

◇中学生の部
渡邊侑子

(福岡県 学校法人コングレガシオン・ド・ノートルダム 明治学園中学高等学校三年)

◇高校生の部
新田智子

(広島県広島市立安佐北中学校高等学校三年)

〔優秀賞〕

◇小学生の部

佐藤理木

(神奈川県 学校法人横浜雙葉学園 横浜雙葉小学校五年)

岩淵仁志
(香川県高松市立牟礼南小学校三年)

◇中学生の部
磯野はな

(東京都 早稲田大学系属早稲田実業学校中等部一年)

松田裕加里
(熊本大学教育学部附属中学校三年)

◇高校生の部
加地由季子

(大阪府立北野高等学校三年)

岸本千穂
(大阪府立北野高等学校三年)

〔佳作〕

◇小学生の部
山田美翔子

(埼玉県越谷市立大沢小学校五年)

合田拓矢
(東京都足立区立立竹の塚小学校六年)

望月梨紗子

(東京都 学校法人光塩女子学院 光塩女子学院初等科三年)

桶田暁子
(神奈川県 学校法人横浜雙葉学園 横浜雙葉小学校六年)

稲崎静華
(香川県高松市立牟礼南小学校三年)

◇中学生の部
加瀬美咲

(茨城大学教育学部附属中学校三年)

内田有美
(東京都 早稲田大学系属早稲田実業学校中等部一年)

神本奈々
(奈良県広陵町立真美ヶ丘中学校三年)

本廣一紗
(山口県山陽小野田市立竜王中学校二年)

中野葉月
(福岡県北九州市立高中生中学校三年)

井上稔梨
(熊本大学教育学部附属中学校一年)

◇高校生の部

孤田有花

(神奈川県 学校法人横浜雙葉学園 横浜雙葉高等学校二年)

森本晶子
(大阪府立北野高等学校三年)

福田遥菜
(広島県広島市立安佐北中学校高等学校三年)

〔努力賞〕

◇小学生の部
戸澤 月

(東京都足立区立立竹の塚小学校三年)

合田祥子
(東京都足立区立立竹の塚小学校四年)

笹森菜々子
(東京都足立区立立竹の塚小学校四年)

石崎智香
(東京都足立区立立竹の塚小学校五年)

松崎千尋
(東京都足立区立立竹の塚小学校五年)

太田真歩
(大阪府藤井寺市立藤井寺北小学校六年)

金森萌未
(大阪府藤井寺市立藤井寺北小学校六年)

◇中学生の部
真殿航輝

(東京都 早稲田大学系属早稲田実業学校中等部一年)

池城麻央

(神奈川県逗子市立逗子中学校一年)

物部瑛也
(京都市京都市立大原野中学校一年)

◇高校生の部
中合理紗子

(東京都 お茶の水女子大学附属高等学校一年)

藤田 海
(愛媛県 学校法人済美学園 済美高等学校三年)

〔バイオニア賞〕 受賞校二十一校

〔最優秀賞三校〕
兵庫県 学校法人甲南学園 甲南小学校☆

福岡県 学校法人コングレガシオン・ド・ノートルダム 明治学園中学高等学校☆

広島県広島市立安佐北中学校高等学校☆

〔優秀賞五校〕
神奈川県 学校法人横浜雙葉学園 横浜雙葉小学校

香川県高松市立牟礼南小学校☆

東京都 早稲田大学系属早稲田実業学校中等部☆

熊本大学教育学部附属中学校☆

大阪府立北野高等学校

〔佳作八校〕
埼玉県越谷市立大沢小学校☆

東京都足立区立立竹の塚小学校☆

東京都 学校法人光塩女子学院 光塩女子学院初等科

茨城大学教育学部附属中学校☆

奈良県広陵町立真美ヶ丘中学校

山口県山陽小野田市立竜王中学校☆

福岡県北九州市立高中生中学校

神奈川県 学校法人横浜雙葉学園 横浜雙葉高等学校

〔努力賞五校〕
大阪府藤井寺市立藤井寺北小学校☆

神奈川県逗子市立逗子中学校☆

京都市京都市立大原野中学校☆

東京都 お茶の水女子大学附属高等学校

愛媛県 学校法人済美学園 済美高等学校

☆ (☆印は本年度副賞贈呈十四校)

〔学校賞〕 受賞校五校
東京都足立区立立竹の塚小学校

静岡県静岡市立玉川中学校

長崎大学教育学部附属中学校

福岡県 学校法人コングレガシオン・ド・ノートルダム 明治学園中学高等学校

ハイリゲンシュタットの森で……

兵庫県 学校法人甲南学園 甲南小学校 六年



おおにし
大西 いずみ

第42回
論文・作文
募集入選作
特集

えっ!! あのベートーベンが遺書を書いた?

それを初めて知ったのは、まだ低学年の頃だった。

音楽室にある作曲家の肖像画の中でも、にらむようにこちらを見ている、あのベートーベンが本当に遺書など書いたのだろうか。

それまで私は、ベートーベンを気迫や自信に満ちた人と思いこんでいたので、不思議に思った。ベートーベンの心に何があったのだろうと。

——これが、ベートーベンと、その音楽に心をひかれるきっかけになった。

そして今年、私は六年生になってきた。

音楽の授業、特に合唱や合奏は、みんなの心を合わせて美しい響きになったとき、とても幸せな気持ちになる。

そして、もう一つ大好きなのが、音楽鑑賞で、いつもいろいろな発見や感動がある。

サン＝サーンス作曲の『動物の謝肉祭』を聴いたときは、静かな湖を美しい白鳥が優雅に泳ぐ様子や、化石がカラカラと音をたてて踊る様子を、すぐに想像することができたので、「私にもわかる!」と、うれしくなった。

ケテルビー作曲の『ペルシャの市場にて』を鑑賞したときには、まるで物語をたどるようにペルシャの市

場が心の中に映し出された。

それを、お話し話のように書きとめる楽しさを見つけた。

また『ベリール』という曲を合唱することになったとき、同じ『ベリール』でも、印象の違う何種類かのCDを聴き比べさせていただいた。生き生きと歌いあげる『ベリール』や、ゆっくりと語りかけるような『ベリール』もあった。私は、同じ一枚の楽譜を見ても、こんなにいろいろな表現ができるのだと思うと、さらに他の曲も聴き比べてみたくなった。

そしていつの間にか、私は音楽を鑑賞する楽しさがわかってきたつもりになっていた。

ところが、今年、一学期の授業で、さらに新しいパターンの音楽鑑賞に出会った。

それは、BGMにベートーベン作曲の『田園』や『運命』や『月光』などが流れる、ベートーベンの生涯の紙しばいだった。

父親から無理な音楽教育をしいられたところでは、幼いベートーベンが痛々しくかわいそうでならなかった。私は思わず心の中で、ベートーベンを応援していた。

才能が開花し、モーツァルトやハイドンにほめられたときには、私もうれしくなった。

ふと、BGMは、ストリーをより強く印象づける役割を果たしていることに気づいた。

その日は、家に帰ってもベートーベンを聴きたくて『田園』のCDを聴いた。

明るいメロディーにカッコウの声。心の目の前に広々とした田園風景が広がる。

鼓動のようなリズムは、まるで自然のいぶきのように思えてくる。ベ

ートーベンも自然を愛したのだろうか……

私は、ベートーベンの生涯を学んだことで、今までよりもベートーベンの曲に親しみを持って、心をこめて聴くことができた。

音楽を鑑賞する楽しみや喜びは、果てしなくありそうだ。

ところで、紙しばいには出てこなかったけれど、ある日の授業で先生が、ベートーベンの家へいらつしやったときのお話や、遺書のこともし話してくださいました。

——やっぱり本当だったのだ……。母とベートーベンのことを話している

と、母も昔、ベートーベンが『ハイリゲンシュタットの遺書』を書いた家を訪れていたことを知った。こんな身近にベートーベンを知る手

かりがあったことにおどろいた。そして、そのウイーンの森の話をしてもらった。ベートーベンの世界が、

ほんの少し近くなったように思った。

簡素で小さな家。ベートーベン時代の茶色いピアノ。補聴器というよりは角笛のような集音器。小さいも

のから、だんだん大きなものを使っても効果がなくなってしまったのか。窓からは教会が見える。人々に祝福を与える鐘の音が、もうベートーベンの耳には届かなくなってしまうのだろうか。

私達は音楽を鑑賞する喜びにあふれている。

けれども、音楽を生み出すベートーベンは、自らが書いた曲さえ聴いて確かめることもできなくなっていた。その悲しみや苦悩が、ベートーベンに遺書を書かせたのだろうか。

しかし、ベートーベンは、その大きな苦しみを乗り越えた。そして、人々の心を打つ、すばらしい曲を作り続けた。

ハイリゲンシュタット。

いつか、その町に行ってみよう。そこは、ベートーベンの深い苦しみと、それに打ち勝った強い心を見守った所だから。

ハイリゲンシュタットの森よ、そこでベートーベンの心に、ベートーベンの音楽に出会いたい。

●学校法人甲南学園甲南小学校（児童数：360名）

・明治45年に創立。再来年度百周年を迎える。「人に優しく自分に厳しい甲南生」をスローガンに、世界に通じる人物を育てることを目標にしている。そして、音楽朝会や指揮の勉強会、さまざまな発表会への参加など、積極的に音楽的活動を行なっている。

《優秀賞》

音楽をきいて広がるイメージの世界 「夜の水族館のお魚さんたちのパーティー」



香川県高松市立牟礼南小学校 三年
岩淵 仁志

ぼくが音楽の時間に、このサン＝サーンさんの『水族館』の曲をきいた時、小さくきこえるピアノの音がとてもきれいで、目の前に、にじ色の魚が気持ちよさそうに泳いでいるところが目にうかびました。

音楽のはじめのころは、クラゲたちがパーティーをしているようにきこえました。それは、だんだん音が大きくなったり、小さくなったりするところが、クラゲが風船のようにふわっとふくらんでゆらゆらゆれながらおどっているみたいな音だったからです。

次に、ほう石みたいなきれいなにじ色の小さな魚がたくさんやってきました。キラキラした体をみんなにうれしそうに見せて泳いでいます。

このピアノの高いキラキラつという音は、まるでほう石みたいにまぶしく光っているにじ色のうろこのようです。サン＝サーンさんは一つ一つの音が魚の動きや色までわかるようにあらわして、この曲はとてもすこいなあと思いました。

この曲のさい後のところでは、とてもかわいいうれんじ色のエンゼルフィッシュが、むれになってすばやく泳いできました。そして、うつぼが近くでシュルシュルと土かんの中に入ったり出たりして楽しそうです。それは、ハーモニカのシュルシュルという音がきこえたからです。

ぼくが家族で水族館に行った時に見たサンゴは、海の水温が高くなり、

白くなってしまうていました。でもこの曲を作ったサン＝サーンさんが見たサンゴは、きつと赤やピンクや緑や黄色などの海の中のきれいなお花のような色だったんだと思います。それは、この「水族館」の曲がとても楽しそうで、美しい色の海の中をあらわしている音だと思っからです。この曲のピアノの高い音は小さいけれど、いろいろな色にキラキラとかがやいています。

ぼくは、水族館できれいなお魚を見るのが大好きです。ぼくがもし海の中にもぐれたら、お魚さんたちがにじ色の光につつまれているこんな世界が広がっているんだらうなあ。図かんを読んだ時、海の生き物たちは、ぼくたち人間よりもずっとす

つとむかしから地球で生きていたことを知りました。だから、きれいな海の生き物たちが、いつまでも元気で楽しくくらせるように、海や地球をよごさないようにぼくも気をつけたいと思います。

ぼくは、音楽の時間にいろいろな曲をきくのが好きです。それは一つ一つの音からイメージが広がって、絵本の世界に入っていくておどろいたくなるような感じがするからです。そして、ぼくもいつかピアノで、

このような様子が目にうかんで楽しい気持ちになれるような曲を作れるようになりたいです。だから、これからも音楽の時間にもっといろいろな曲をきいてみたい

《優秀賞》

みんなにとどけ、日本の音楽



神奈川県 学校法人横浜雙葉学園 横浜雙葉小学校 五年
佐藤 理木

「花」。それは、私に、また一つ日本の新しい魅力を教えてくれた音楽でした。

「はあるのお、うらあらのお、すうみい、だあがわあ」。

女声ソプラノとアルトの美しいハーモニー、すんだ歌声がひびきわたる。なぜか私は、最初の一音から、華やかな気分になりました。いつも待ち遠しい音楽の授業。今

日はかんしようの時間です。この歌詞に登場する隅田川。それは二年前の春、私が水上バスで下った川です。川の風、水のせせらぎ、春のにおい、自然を実感し、ゆつくりとした時間の流れを感じることができたひととき。その時見えた今でも忘れることのできない満開の桜が、一しゅんにして鮮やかによみがえってきました。高層ビルが建ちならび、交通量の増

加でそう音だらけの現在でも美しいと感じられるのに、作曲当時の風景はどれだけ美しいものだったのでしょうか。

今まで、音楽は、バッハ、モーツァルト、ベートーヴェンなど外国の作曲者が作る、オーケストラがひくような、大曲ばかりだと思っていました。それにくらべて日本人の作曲者の曲は、どちらかというと地味な

●学校法人横浜雙葉学園横浜雙葉小学校 (児童数：503名)

・創立から96年を迎えるカトリック校。「徳においては純真に 義務においては堅実に」の校訓を掲げ、神に対して、人に対してまっすぐに生きることを伝えている。

第42回
論文・作文
募集入選作
集

とです。

それぞれの国らしいリズムミカルで、テンポもユニークな、思わず笑顔になつてしまう曲をたくさん聴くことができました。そして最後に、その講堂にいる全員で、日本の『ふるさと』という曲を歌うことになりました。私は、思わぬ所で古くから親しまれてきた日本の曲と触れあえる機会にびっくりしました。そして外国の人が日本語の曲を歌えるのかなと、とても不思議でした。ところがなんと、ハンガリーの人もハワイの人もびっくりするほど美しい声で歌っていました。私は、日本の曲を外国の人と歌って心が一つになったので、世界は言葉だけではないんだ、音楽でも心は一つになるんだ、ということがわかり、き重な体験に出会うことができました。

私は幸運にも、言葉をこえた音楽との出会いにめぐまれ、音楽のことがもっと好きになりました。そして、日本にも、ほこれる曲があり、作曲者がいること、日本の心を音楽で伝えられる事がわかり、このことをも

イメージがありました。しかし、この『花』という曲を聴き、その考えが変わりました。日本独特の四季の素晴らしさが、曲からすぐく伝わってきて、日本人も外国人におとらしい曲を作ることができるんだと思いいただかほらしい気分になりました。この曲の作曲者、滝廉太郎さん。私は、この方のことを全く知りませんでした。けれどこのすばらしい曲を作った人が、この方だと知った時、日本人のだれもが知っているほど、有名だと知った時、バッハなど音楽室にならぶしよう像画の中に、滝廉太郎さんの写真があると知った時、私はこの方を知らなかった自分はずかしくなり、滝廉太郎さんにあまりたくなりました。

日本の曲にも、バッハやモーツァルトとは違った良さがあると知り、感動していた矢先に、また色々考えさせられる出来事がありました。それは、横浜開港百五十周年のイベントで学校の講堂に、ハンガリーの女声合唱団とハワイの混声合唱団が集まり、コンサートが開かれた時のこ

つと、いかすことができたらいいなと思いました。

『花』というこの曲に出会う前の私と、同じ人が、きつとどこかにいると思います。そんな人に「日本にも、良い曲はたくさんあるよ。音楽は決して外国だけでなく、色々な所に所在しているよ」と、私は伝えたいです。そしていつか大人になったら、未来の子供達にも教えたいです。

そして、自分自身も、日本人だからこそ、もっと深く、日本の「心」「伝統」「文化」について知り、学ぶことができたらいなと願っています。これからも音楽と共に――。

私が出会った『荒城の月』

福岡県 学校法人コングレガシオン・ド・ノートルダム 明治学園中学高等学校 三年



渡邊 侑子
わたなべ ゆうこ

第42回
論文・作文
募集入選作
集特

心の深い所まで染み入ってくる、物悲しいピアノの前奏。バリトンの男性歌手が朗々と歌い始める。教室の中には、うって変わったように、ビーンと張りつめた空気が漂う。思わず背筋を伸ばしてしまった。

私は中学三年生になって、学校の授業で滝廉太郎作曲の『荒城の月』を鑑賞した。メロデーは知っていたのだが、音楽室で初めて聴いた時の奥深い部分がキューツと締めつけられるような感覚に襲われた。日常生活の中では聞き慣れない文語調の歌詞。そして、歌い出しの「花の宴」や春のイメージとはかけ離れた旋律のもつ悲しみが、私の心に引っ掛かってしまったのだ。「春」というテーマの学習中に出会った、荒れ

果てた城跡に月だけが照らしている光景は、私の頭から離れなくなってしまった。

その日の夜、私は眠る前に何だか月を眺めてみたくなり、空を見上げた。満月だった。思わず息をのむほどの美しさ。銀色の透き透った光が辺り一面を包んでいる。私の家は、昔太宰府に流された菅原道真が無実を訴えて天を拝んだという天拝山の麓にある。この夜の天拝山の月光は、昼間音楽室で聴いた『荒城の月』のメロデーと溶けあって、私の心に深く染みこんでくるようだった。実は、天拝山は、戦国時代には筑紫氏の居城であり、山全体が山城だったという。

「まさしく、荒城の月っていう訳

目の前に広がるこの大自然のスケールの大きさに比べて、人間は何てちっぽけな存在なのだろう。

「天上影は変わらねど 栄枯は移る世の姿」。

また、何千年何万年と変わらない地球の自然の営みに対して、私達人間の営みや人生は、何と儂いものなのだろう。

さらに、晩翠の詞に加えた廉太郎の物悲しいメロデーが私の心に語りかけてくる気がした。どんなに栄えた城でも時の流れの中でいつかは荒れ果ててしまう。人間の営みは儂い。それ故に美しいのだよ、と。日本を遠く離れたカリフォルニアの山中で、私は月の光を通して、晩翠と廉太郎の心を感じるといふ不思議な体験をしたのだ。

私達は、日常生活の中で、満月の包み込むような光や、自然の営みのスケールの大きさ、そして、人間の営みの儂さを意識することはほとんどない。しかし、『荒城の月』を鑑賞する時、音楽を通して語りかけてくる晩翠や廉太郎の心を感じとるこ

ケード山脈にあるウナライでキャンプ生活を体験した。特にバックパックの中に食料と寝袋を入れて、四泊五日、野宿をしながらハイクをするプログラムの中で見た満天の星空は、今でも目の奥に焼きついてい

る。全く街灯のない、山中の岩場で見上げた星空は、プラネタリウムよりも実際はもっと星が多いことを実感させてくれた。

また、私は月の満ち欠けを初めて意識する体験もした。新月には、真っ暗闇の山中では、星の輝きが増したように感じられるが、満月になると、月の光が広大な大自然の山々や原野全体を包み込んでいく。岩場で寝袋にもぐり込み、満天の星と満月を見上げた時、私の心の中に、『荒城の月』のメロデーと、天拝山の上に浮かんでいた満月の光景がよみがえってきた。そして、今まで少し理解し難かった土井晩翠の歌詞が、私の心にそっと語りかけてくるのを感じた。

「今荒城の夜半の月 変わらぬ光たがためぞ」。

とで、私の心の奥深い部分が、私自身の『荒城の月』の原風景を呼び覚ますのだ。音楽の力って、本当に不思議だ。

「人間は儂い存在だ。だが、それ故に美しいのだよ」。

この夏、『荒城の月』が教えてくれた、人間の儂さと美しさを、私達の心の中に刻みこんでおきたい。人間の営みが儂いからこそ、人は短い人生を精一杯に輝かせて、力いっぱい自分の命を生きていくのだ。私は、音楽から、また一つ大きな不思議な力をもたらした気がする。

●学校法人コングレガシオン・ド・ノートルダム 明治学園中学高等学校（中学校生徒数：749名）

・1910年創立。学校目標は「より高く挑戦」。人々のために生きる謙虚で献身的な姿勢と確かな学力の獲得という、カトリックの教育理念に基づいた全人教育を目指している。

《優秀賞》

音楽から広がる私の世界

東京都 早稲田大学系属早稲田実業学校中等部 一年



磯野 はな

「メインファーター、メインファーター」。悲しく響き渡るその声に引き込まれた。

太く腹の底にまで響く声がかぶる様に心える。疾走する馬のひづめを思わせるピアノの音に私まで緊張が高まる。頭に浮かぶのは深く垂れ込める灰色の雲と暗い森だ。

途中、優しく包み込む声に闇が晴れるかと感じられたのもつかの間、またピアノの音が追いついてる様に続く。何かが迫る危機感と恐ろ心を感じさせながら、曲は途切れる様に終わった。

初めて聞いた『魔王』だった。短い曲ではあったが映像を見ている様で余韻にひたつた。ピアノと歌手だけで作り上げた迫力の世界だ。

合わせをしているらしい。彼女の練習の声はエスカレーターを上っていく私達をどこまでもどこまでも追いかけてくる。その美しいソプラノと声量は感動だった。私達が買い物に向かう足を止め、一階に降りたのはい言うまでもない。サイ・イエンゲンというオペラ歌手の公演はすばらしい時間だった。

生の声の迫力、ピアノの音は体にも心にも響いた。私は少し習ったことのあるピアノにふれたくなった。歌も気になる。次の授業ではしっかりとお腹から声を出して歌おう。演奏家や歌手には遠くおよばない

《佳作入選者および作文題名》

《小学生の部》

- 山田美翔子「アジアの音楽をきいて」
（埼玉県熊谷市立大沢小学校 五年）
- 合田拓矢「繰り返しの音楽の楽しさ」
（東京都足立区立立竹の塚小学校 六年）
- 望月梨紗子「指き者ってむずかしい」
（東京都 学校法人光塩女子学院 光塩女子学院初等科 三年）
- 桶田咲子「暗やみから光へ」
（神奈川県 学校法人横浜雙葉学園 横浜雙葉小学校 六年）
- 稲崎静華「水ぞく館」をきいて」
（香川県高松市立牟礼南小学校 三年）

作曲家が表した魔王という怪物は何者なのだろう。歌詞の意味が知りたくなり、ゲートルについて書かれた音楽史の本を手にとった。

ゲートルの生涯において魔王の詩とつながる部分があった。彼が幼い子供を四人も亡くしているという事実だった。魔王は伝説の怪物とも言われているが子供を奪った病魔のことだったかもしれないのだ。

この詩にひかれ、物語の世界観を作りあげたシューベルトにも興味があった。

私は代表的な曲を集めたCDを買いに出かけ、自宅で一気聞いてみた。魔王のせん律とは違う、明るく、楽しい曲もたくさんあった。『美しい水車屋の娘』『冬の旅』『白鳥の歌』

が自分で弾いてみる、歌ってみることも良いと思い始めた。アルトリコーダーも合唱の時間も今まで以上に楽しくなりそうだった。

授業で聞いた『魔王』に興味を持ち、シューベルトの歌曲を楽しみ、ゲートルという詩人を知った。

サイ・イエンゲンさんは歌劇の一節を、その豊かな声量とコロラトユーラソプラノと呼ばれる美しく高い声で印象づけてくれた。彼女の演じる『魔笛』や『椿姫』をいつか観に行きたい。歌劇のことも知りたくなった。これまでは特に音楽に親しむ環境にいないわけでもなく積極的に楽器を

はどれも心安らぐものだった。どこかで耳にしたことのある曲がシューベルトのものであったことも知り、また一つ学べた。

しかし、これほどたくさん名曲を残したシューベルトがたった三十一歳という若さで亡くなっていったことには驚いた。五線紙を買うにも不自由した貧しい時もピアノを弾き、明るく過ごしたそうだった。だからこそ生まれたであろう名曲に改めて感じ入った。

この夏、ある百貨店を家族と歩いている時に、高く美しい声に引き寄せられた。

二階からのぞきこんだホールには、まぶしい光の中にきれいな女性が立っている。本番を控えて伴奏者と音

習うこともなかった。クラシック音楽は堅苦しいとさえ思い込んでいた。

しかし出会った歌曲は私を別の世界へ連れて行き、楽しむことを教えてくれた。曲の背景と共に、遠い昔に思いを馳せる。名曲が生まれた国々をいつか訪れたいと思う。国を越え、言葉の違いも越えて伝わるものは重みがある。私の音楽への関わり方は変わってきた。

次はどのような音楽が私の心に響いてくるだろうか。古典の名曲かもしれないし、ポピュラー音楽かもしれない。いずれも楽しみたい。また発見と発展があるにちがいない。

《高校生生の部》

- 孤田有花「ウエストサイド物語」
（神奈川県 学校法人横浜雙葉学園 横浜雙葉高等学校 二年）
- 森本晶子「胸ときめく新しい世界との出会い」
（大阪府立北野高等学校 三年）
- 福田遥菜「音楽が教えてくれたこと」
（広島県広島市立安佐北中学校高等学校 三年）

《努力賞入選者および作文題名は、23pに掲載》

●早稲田大学系属早稲田実業学校中等部（生徒数：713名）
・明治34年開校。「三敬主義」を校訓、「去華就実」を校是とし、「豊かな個性と高い学力をもち、苦難に打ち勝つたくましい精神力を兼ね備えた人物」の育成をめざしている。

第42回
論文・作文
募集入選作
集特

“自分”を見つける鏡



熊本大学教育学部附属中学校 三年
松田 まつた 裕加里

ポツ……ポツ……ポツポツ……。窓の外で雨が一滴、また一滴とアスファルトに弾かれる。今日は夕立だ。夏の空は変わりやすいもので、さつきまで晴れていたのにいつの間にか降っている。しかし、私は雨が嫌いではない。それは、雨だれを聞くとあのメロディーが耳に蘇ってくるから。さあ、聴こう、あの曲を。目を閉じて、幾つもの音を重ねて。ポツ……ポツポツ……タンタンタン……ン……。

暑さが増してきた七月の音楽の時間、私はその曲と出会った。その頃は歌う方が好きだった私にとって鑑賞は大好きというわけではなかった。しかし、その授業で先生が仰った作曲者の名を聞いて突如興味が湧いた。

「ピアノの魔術師」フランツ・リスト。フレデリック・ショパンと肩を並べる「天才」と言われたロマン派のピアニストだ。

ロマン派の曲はバロックや古典派のように安定してはならず、不協和音や不規則なリズムが多く一番好きな曲風なのだ。私のひねくれた性格のせいなのだろうか。そんなわけで、先生が最初に見せて下さった映像は私に衝撃を与えた。

まず、リストが『バガニーニによる大練習曲』を創り上げるきっかけとなった、ニコロ・パガニーニの『24の奇想曲』の中の一曲である。ヴァイオリニストの腕がしなやかに動き弦を弾く、鋭い音がホルルの空気を切り裂く。ヴァイオリンと一体

になった演奏者。軽やかな跳躍、響く細い音、震える空気。最初から最後まで口を開けていた私は呆然となった。ヴァイオリンの経験がない私にもその技術の高さはわかった。まさに、凄絶な演奏だった。パガニーニがいかに凄い音楽家だったのか納得がいった。

そして、追いつけをかけるように見せられた映像、それがバガニーニの『ヴァイオリン協奏曲第二番第三楽章』をもとにリストがピアノ独奏用に作曲した『バガニーニによる大練習曲』から第三曲『ラ・カンパネラ』であった。音が指先から零れ落ちた。激しい鋭さはなく、ガラスに水滴が落ち跳ねているような軽快さがあった。楽しそうな表情でピアノ

を奏でるピアニストを見てみると、なんだかこちらも楽しくなってきた。下手な鼻歌でメロディーを口ずさむ目を閉じてみると、音が頭の中に絵を描いてくれた。真っ白な空間に次々と落ちてくる雨の絵を。……ああ、なんて心地良いんだろう……。

それからというものの、私は様々な演奏者の『ラ・カンパネラ』を聴いた。幾つもの世界を楽しんだ私の中で最も印象に残ったのは、フジ子・ヘミングの演奏だ。授業の時の演奏を「動」とすると、「静」にあたるのだろうか。水面に雫が落ちて水紋が生まれるようだった。穏やかに染み渡る音と音が重なり、静寂の世界

で新たに構築されるメロディー。やわらかく繊細でしっとりとした音色。私の中ではイメージが正反対なのに、違和感はなく無かった。むしろ、こちらの方が私にはしっくりきた。

考えてみれば、この曲を最初に聴いた時から私のイメージは「雨」だった。元々の意味である鐘よりも、よりふさわしく感じる。これは私の日本人的感覚のせいかもしれないし、雨が好きだからかもしれない。人それぞれ感覚は違うから、と言ってしまうまでもかもしれない。しかし、その「感覚」の中にその人の性格、経験、全てが混ざっているのではないだろうか。言ってしまう

ば、鑑賞にはその人自身が表れるということだ。

心を聞いて音に身をまかせてみれば、「自分」が見えてくる。音の一つ一つが急にストーリー性を帯びてくる。曲が進行し曲想が変わるのがとても楽しくなる。音が輝き出し、全てがかけがえのないものとなる。そして曲が終わった時、頭の中はからっぽはず。さつきまで見ていた「自分」の鏡のような世界の残像に浸る。——楽しみながら「自分」を見つけるのも、悪くない。そう思いながら、私は今日もこの曲を聴いている。窓の外を眺め、そっと目を閉じて。

《努力賞入選者および作文題名》

《小学生の部》

- 戸澤 月「馬ののって」について」
〔東京都足立区立竹の塚小学校 三年〕
- 合田 祥子「ファランドールを聞いて気づいたこと」
〔東京都足立区立竹の塚小学校 四年〕
- 笹森菜々子「ファランドールをきいて」
〔東京都足立区立竹の塚小学校四年〕
- 石崎智香「音楽のおもしろさ」
〔東京都足立区立竹の塚小学校 五年〕

- 松崎千尋「動物の謝肉祭」を聞いて」
〔東京都足立区立竹の塚小学校 五年〕
- 太田真歩「聴き比べ」
〔大阪府藤井寺市立藤井寺北小学校 六年〕
- 金森萌未「心に残る音楽」
〔大阪府藤井寺市立藤井寺北小学校 六年〕

《中学生の部》

- 真殿航輝「元気をくれる曲」
〔東京都 早稲田大学系属早稲田実業学校中等部 一年〕
- 池城麻央「音楽の素晴らしさ」

《高校生部》

- 中谷理紗子「Music Heart」
〔東京都 お茶の水女子大学附属高等学校 一年〕
- 藤田 海「未知の魅力」
〔愛媛県 学校法人済美学園 済美高等学校 三年〕

●熊本大学教育学部附属中学校（生徒数：474名）
・「響きあいの精神」を綱領とし、日常生活をはじめ「未来創造社」や各学校行事に至るまで、生徒主体による縦割りにて行ない、社会人基礎力育成をめざす。全生徒が清掃活動、合唱に情熱と愛を注ぐ。

音楽が教えてくれたこと

広島県広島市立安佐北中学校高等学校 三年

新田 智子
（しんたろ ともこ）

「なんだろう」。思わず呆気にとられたのは、音楽の授業での出来事だった。先生は、色々な授業をする方で、高校三年生になった私たちにいつもピアノを弾かせてみたり、聴音の勉強をさせたりと、そんな授業に慣れていたとき、「今日から鑑賞をします」と言われたのだった。

吹奏楽部に入っている私にとって、「音楽」とは、生活そのものといつて良いくらい身近なものであり、そもそも、吹奏楽部に入部したのも「音楽鑑賞」がきっかけだった。私はまだ小学生で当時中学生だった姉の吹奏楽コンクールを初めて見に行ったとき、私の目に飛び込んで来たのは、今まで見た事のなかった実物のトランペットやクラリネットなど

いて、お尻を上下に動かしている子どもたちが鮮やかな暖色系の服を着て、オーケストラの演奏は不思議な雰囲気醸し出していった。しかし、かえってそれが私の興味を引いていたのだ。その音楽には物語があるような気がして、いつの間にか私の頭の中では、勝手に物語が作り出されるくると回っていた。後々、ドキュメントを見てわかったことだが、読み取ることができなかった作曲家や指揮者、そして子どもたちやそのダンスを教えた人の思いがたくさん隠されていた。私は、始めから一度も目を離すことなくその映像に見入っている、とどこどころタイトルにもなっている「春」を感じることができたのだが、私の知っている「春」とは、同じところもあるが、何かが違う。そんな気がした。

私の思う「春」は、暖かい日の光が、黄緑色の大地に差し込んで、さわやかな風でタンポポが揺れている、そんな暖かく優しいイメージだ。だが、それに対して、この曲の「春」は、荒れ果てた大地に種が植えられ、

の様々な楽器。その楽器からいろいろな音が奏でられ、音楽を作り出している、私の心はうきうきと高鳴っていた。私は幼いながら、あまりの凄さに感動していたのを今でも覚えている。そんな中で、演奏している姉を見て、うらやむ気持ちと憧れの思い、そして何より、「私もこの中の人みたいになりたい」、そんな強い思いから、私は中学校に入学して今に至るまで楽器を演奏すること、つまり吹奏楽を続けて来たのだ。そんなことをふと映像を見て思い出した。そのせいもあって、鑑賞というものが他の人よりも好きなことに自信がある。

そんな私がなぜ呆気にとられたかという、私には見慣れない光景が嵐のように激しい風が吹くと、植物たちが勢いよく芽を出す、どこか冷たいが、「春」そのものの意味がちゃんと植物たちを通じて伝わってくる、そんな感じがした。

今考えれば、あのお尻を上下に動かしていたのも、きっと大地が春の訪れを告げるための動きだったに違いない。だから、始まりをあのシーンにしたのだろう。

そして、私は素直に音楽を聴く事が久しぶりにできて、喜びもあった。いつも、部活で表現や音質を気にしながら練習をしているせいで、最近では自分でも気づかなかったが音楽に神経質になっていたようだ。そんな私だったが、映像もあるせいか、耳へと新鮮に音が入ってきて、自然と曲に対する思いが深まった。

そして、もう一つこの映像が私を釘付けにさせた理由は、やはりベルリンフィルの演奏をバックに、ダンスを踊っている子どもたちがとても魅力的であったことである。子どもたちの踊っているダンスとは違うが、私も以前にジャズダンスを習っていた

目の前のスクリーンに映し出されていたからだ。その見慣れない音楽の名は「春の祭典」。授業では、三回に分けてベルリンフィルハーモニー管弦楽団の演奏にのせて、ドイツにあるスラム街の子どもたちが踊るダンス、その子どもたちがダンスを踊るまでの実際にあったドキュメント、そしてオーケストラだけの演奏を見るところだった。

最初に見たベルリンフィルとダンスは、音楽に「見慣れない」とはおかしい表現かもしれないが、聴く音楽というよりは「見て目から聴く」音楽という感覚に近いものだった。先生から軽く内容を聞かされ、いざ鑑賞となった始めのシーンはあまりにも印象的だった。ねっころがって

た。曲に合わせて身体を動かすことが好きで習い始めたのだった。

さらに、ベルリンフィルといえは、一度は聞いたことがあるほどの有名な楽団だ。そんなベルリンフィルとダンスの夢のコラボレーションに私の心までもが躍るようだった。演奏そのものは、やはり素晴らしかった。吹奏楽とは違い、弦楽器が加わることににより表現の幅が広がることに私は驚いた。弦楽器の弓で奏するあの繊細な音に、管楽器の深みのある音へ打楽器の迫力ある音のスパイスがブレンドされていて、何度も聴きたいような演奏が、スピーカーから耳に伝わってきた。その演奏に息をびたり合わせて踊る子どもたちを尊敬する気持ちにもなった。子どもたちのなめらかな手の動き、必死な表現を見て、「この子達は、相当頑張ったのだなあ」と思った。

しかし、本当の意味での相当な頑張りを知らない私の心を百八十度変えたのは、子どもたちのダンスを踊るまでのドキュメントを見てからだった。ドイツといえは、みんな裕福

●広島市立安佐北中学校高等学校（高等学校生徒数：312名）

昭和59年開校。平成15年広島市立安佐北中学校併設。教育目標に「自己に挑戦し社会に貢献できる人間の育成」を掲げ、高い見識と品格を備えた生徒の育成を目指す中高一貫教育校。

何も知らない勝手な私の想像。今まで知らなかったのだが、思っていたよりも他国から難民を受け入れていて、その難民のほとんどが子どもたちなのだ。その子どもたちが、今出てくるスラム街の子どもたちだったわけだ。多くは、親を紛争で亡くし、もしくはお金がなくて親から捨てられた。

その中の一人に、ナイジェリアからドイツに移住してきた黒人の子どもがいた。その子は、一人で暮らしていて、学校にも一人で通っていた。道端で、ドイツ人に英語で話しかけても、その子の言葉は通じない。なぜならば、その子が黒人だからだ。人種差別がいまなお続いているのだ。それでも、その子はダンスをするのになって、一生懸命取り組んでいた。ダンスを踊ることで何かをつかもうとしていた。やがて、その子に、ダンスを通じて友達ができた。ドイツに来ての初めての友達だった。「音楽に国境はない」とはよく言うが、本当にそうだと改めて思った。そればかりか、人種なんて関係ない

ということも感じられた。

その子どもの他にも、初めは、ダンスを踊ることに興味をもてずに、喋ってはばかりで練習をしない落ち着かない子どもたちばかりだった。その子たちは、自分に自信がなく、「喋っていないと不安になる」、そんなことも言っていた。中には弱音を吐く子さえいた。しかし、何週間も経つうちに、自分にはできるといふ自信がついていき、喋ることをやめ、ダンスを踊ることに集中しだしていた。私は、子どもたちの抱えているものが、一人一人重すぎて、考えさせられた。親がいない、友達もいない、自分のことをわかってくれる理解者がいない、支えになってくれる人がいない。そんな境遇も違う、何に関してもやる気のなかった子どもたちが、同じ目標をもち、一つのことを達成できたということ、それはきっと子どもたちにとってこれから生きていく上での糧になることだろう。そして、子どもたちを動かしたのは、ダンスであり、音楽の力によるものだ。音楽によって何人も

が動かされたのだ。音楽に秘められている力は、本当に凄いと思う。

この鑑賞を通じて、私が得たものも本当に大きかった。日々の生活を送る中で、友達とけんかをして学校に行きたくないとか、ただ面倒くさいから勉強したくないかと思っっている自分の悩みのあまりの小ささに腹が立った。こんなにも、世の中には日々の生活を必死に生きようとしている人が何人もいるのに、悩めることと自分が贅沢すぎると、私は自分のことを強く恥じた。そして、日常的に楽器を吹くことができ、音楽と触れ合っていることを当たり前ではなく有り難いことだと思った。これから何があっても、頑張ろうという気持ちを私に与えてくれた。それと同時に、忘れかけていた、吹奏楽をしたいと思っただけのときの純粹な感情を、私は、この鑑賞で思い出させてもらった。

大切なことを教えてくれたこのベルリンフィルの演奏、そして、子どもたちのダンスに「本当にありがとう」と、感謝の気持ちを伝えたい。

《優秀賞》

「いいもの」を求めて

外は激しい雨。しかし音楽室の中にはそれさえものみ込む静寂がある。音が鳴り始めるまでの数秒は、雨の音しか聞こえない。しかし鳴り始めるといつのまにか雑音は聞こえなくなっており、私の聴覚はすべて音楽に支配される。そこにいるみなが一点に集中している。この独特のぴりつとした緊張感、一音一音が落ちてきて、心の奥まで染み込んでいく感覚……。他のことは考えずただ音楽だけを感じるこの時間は、私にとって心が生き返る時間だ。

モーツァルトの『ピアノ協奏曲第二十三番イ長調K488』。初めて聴いたときはただ美しい曲だと思わなかったが、三度目聴く今はまた違った聴こえ方がするから不思議

だ。耳に心地よいだだけであつた華やかなハーモニーがどこかもの悲しく聞こえる。メロディーに物語を感じる。気付かなかつた動きが見える。それはただ聴き慣れてきたからだと言いつつ切れるものではなく、自分の心の状態や美しさも影響しているのだと思う。「音」をとらえるのは聴覚だが、「音楽」をとらえているのは心なのだ。

それだけに、真にいいものを見分け、すみずみまで味わい楽しむためには、それを感じることでできる心が必要である。その心を磨くことで、そのものつ本当の良さやおもしろさがかかる。心を磨くためには「いいもの」にたくさん触れることが一番大事だと思う。



加地 由季子

大阪府立北野高等学校 三年

しかし、もので溢れかえるこの世の中でいいものは多くはなく、また考え方も価値観も違う個人個人にあつたいいものとなると、数が非常に限られてくる。それを手さぐりで探し出すのは至難の業だ。何度も失敗を重ねてやっと見えてくるものであろう。鑑賞の時間には、経験の深い先生が私達のために選曲してくださいるので、その限られた音楽に触れることができる。鑑賞初心者私としては、たいへん有難い。

音楽の授業で鑑賞するのはクラシックだけではない。ミニマルミュージックという反復と変化を用いた現代音楽や映画のBGMなどそのジャンルは幅広い。映画のBGMといえば、北野武監督の『座頭市』の一部

●大阪府立北野高等学校（生徒数：961名）
・1873年創立。「文武両道」をモットーとし、学習面はもちろん、体育・文化活動も手を抜くことなく真剣に取り組む校風をもつ。行事も多く多彩で、生徒たちの学校生活に潤いを与えている。

を見た。雨の中農民がタップダンスをする場面のBGMはミニマルミュージックだった。フィナーレの全員がタップダンスは映像も印象的だが、そのBGMにも工夫が凝らしてあり、和楽器を使って和風に仕上げてはいるものの現代的で新鮮であった。

またある日には、ワーグナーの楽劇『ニーベルングの指環』の中の音楽、『ワルキューレの騎行』を聴いた。大変勇ましく、力強い。またその楽劇自体も陰謀がうずまく重々しい作品だ。すると先生が別のCDをかける。『ワルキューレの騎行』に似ているのだが何かが違う。それは映画『崖の上のポニョ』の中で使われる『ポニョの騎行』。原曲の見た事なパロディーになっている。映画では、この曲をバックにポニョが波の上を走るらしい。ポニョの本名もこの楽劇と関係が深いようだ。それを知って私は、ポニョとワルキューレというそのギャップに思わずにやりとしてしまった。音楽を知れば、映画の見方も変わる。普通に映画を観ていたら聞き流していたかもしれ

ない。原曲を知っていたら、このようなさりげないセンスにおもしろみを感じる事ができる。

いいものには垣根がない、というのは最近よく感じる事だ。音楽に限らず美術作品、文学などの芸術や、建造物、景色、食べ物、すばらしい人……、真にいいものならその感覚はどこかつかつていっているように感じる。大伴家持の作品でこのような歌がある。

うらうらに 照れる春日に 雲雀
上がり 情悲しも ひとりし思へば

これは古典の授業で習った歌だが、直接もの寂しさを表現するのではなく、前半に暖かで平和な情景を描くことで、その後の悲しみが強調される。先ほど華やかさの中にも悲しさを感じたのは、この歌を知っていたからかもしれない。また軽薄な楽しみではなく、奥深いおもしろさというものを日本人が感じることができるのは、枕草子や松尾芭蕉の俳句など、しみじみとした情緒を感じさせる作品を習ったことがあるからか

もしれない。景色を見て心が大きくなる。滝の迫力を全身で感じる。奥深い味が心に染み入る。人に会って心が暖かくなる。何気ない経験もすべて心に作用する。よさを感じる心というものは、いろいろと理屈をつけて言葉で表すこともできるかもしれないが、その本質は言葉にできない自分自身の感覚だ。その感性はもって生まれるものではなく、よい経験の蓄積から徐々に磨かれていくものだ。

私は今、ほとんど無知の状態だ。経験は浅く、感性も鈍い。だからこそこれからどんな経験を重ね、自分を磨いていきたいと思う。真にいいものを求めて。この旅は今、鑑賞によって始まった。そして一生終わることはないだろう。しかし年を重ねることに、その楽しみはより大きく深くなっていくのだろう。そんな将来がとて待ち遠しく、わくわくする。

音楽が消えていく。日常が戻ってくる。私はため息をついて、少し微笑む。

《優秀賞》

鑑賞の空気感

「今日はシヨパンにしようか」。絵本を読み終えた母の優しい声、ゆつくりと流れ出すピアノの優しい音。幼い頃、毎晩布団の中で絵本を読んでもくれた母は、私が眠るとき必ずクラシック音楽を流してくれていた。音楽好きの家族にうまれたため、物心付いた時から私の周りにはクラシックが当たり前のよう

に存在していた。一人で眠るようになってからも、自分でクラシック音楽を流して寝ていた。静かな寝室に美しく響くクラシック。私はこの静寂が大好きだった。

中学校に進学し、音楽の授業で鑑賞をするようになった。

「ベートーベンの『春』を聴きます。静かにね！」

一瞬静まる教室。曲が流れ始め、ああいいなあと目を閉じかける。「眠むてー」

どこからか声が聞こえ始め、ざわつきだす教室。ああ、やっぱり。小学校の時も鑑賞と呼ぶとまではいかずとも、CDを聴く時間はあった。その時もこんな感じだった。もう慣れっこになってしまっていた。隣の席の子に話しかけられ、私もおしゃべりを始めた。ある日、イタリアのカンツォーネを声高らかに歌うおじさんのビデオを見た。ビデオなんてなかなか自分では見られないので、ワクワクしていた。しかし曲が始まると、一瞬にして音楽室が爆笑に包まれた。すごく悲しい気持ちになった。急いで家に帰って一人でCDを

大阪府立北野高等学校 三年



岸本 千穂

聞き、クラシックは一人で聴くものだなと思っただ。

高校生になり、芸術の授業は美術・書道・音楽から一つを選ぶ選択制となった。私は迷わず第一希望を音楽としたのだが、残念ながら希望は通らなかつた。学年が上がり二年生となる時、もう一度希望調査が取られ、私は晴れて音楽選択者となった。大抵の人が一年生の時と同じ芸術選択をするので、私は去年から音楽の授業に慣れ親んでいる人たちの中に混ざるとい感じだった。何もわからないまま、きつと皆からすればいつものように、なのだろう。鑑賞が始まった。

ふわっと教室の空気が変わった。私はなぜか無になり、自分の心と会

話していた。ああ、なんて良い音なのだろう。心の隅々まで音楽が響き渡る。やはり設備の整った教室で聴く音楽は、家のコンポとは比べ物にならないほどの感動を運んでくるのだなあ。いつのまにか私は音楽の真ん中に立っていた。まるで、温かい母の手に包まれたかのような、不思議な感覚を味わった。音楽が止み、これもまたいつものように、なのだろう。発声の練習が始まった。しかし私はそれ所では無かった。一体今の感覚は、感動は、何だったのだろうか。答えが知りたくて、家でいつものようにCDを聴いた。心安らぐ音楽が流れた。しかしそれは、あの音楽室で味わったものとは明らかに違った。答えを見つけることは出来なかった。

かで味わった事がある……考える……。曲が終わり現実世界に帰ってきたと同時に、やっと思い出した。ああ！昔おねだりして祖母に連れて行ってもらった、クラシックのコンサート会場だ！そうだったんだ！鑑賞中の音楽室には、あの会場とよく似た空気が流れていたのだ。コンサート会場は、クラシック好きが集まる場所だ。だからコンサートが始まる前でも、マナーの良い、どこか落ち着いた雰囲気が漂っている。演奏が始まると、それこそこれでもかというぐらい、全員が音楽に浸る。何と表せばよいのだろうか。静寂、いや、それ以上のあの空気感。幼な心に、私も大人の仲間入りかしら、なんて感じたものだ。あの空気、そう、あの生でしか味わえないはずの空気感が、この音楽室にはあったのだ。思わず辺りを見渡した。そこには、いつもと変わらないクラスメイトがいた。ここに集まっているのは必ずしもクラシック好きの人たちばかりではないだろう。いやむしろ、好んでクラシックを聴く人などとても少

ないだろう。なのに何故、あんな空気になるのだろうか。「一年生の初めての授業のとき、鑑賞の時間は完全なる静寂を求める。最初は洪々静かにしていた生徒たちも、何度も聴くうちにいつのまにか音楽に浸るようになってくる」音楽の先生はこうおっしゃっていた。なるほど、このクラスメイト達は一年間、その授業を受けてきて、鑑賞に対する思いが変わっていたというわけだ。私はとてもうれしくなった。この感動は、設備の整った教室が運んで来たものではなかったのだ。音楽と真剣に向き合う人間から、クラスメイトから、溢れ出たものだったのだ。あの空気感は、唯一人間にしか出すことができない「音楽」だったのだ。今でも家で一人、クラシックのCDを聴く時間は大好きだ。私は色あせたシヨパンのCDを手にとり、静かに目を閉じる。昔の自分に会ったら、大切な仲間たちと聴く音楽の良さを教えてあげよう。一人ではあの空気感を出せないのだから。